

第5回 西アジア分科会 議事録

開催日時: 2007年 6月 1日 15:30~17:00

場 所: 東京国立博物館 平成館 第2会議室 (3F)

出席者(敬称略) : 前田、上岡(分科会委員)、浅野、勝平、樋口(文化庁)、齊藤、守山(外務省)、内田、片山(国際交流基金)、山内、永井(東京文化財研究所)、清水、青木、田代、豊島、谷口(コンソーシアム事務局)

■ アジナ・テパ遺跡保存修復事業報告 [東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター 山内和也]

報告の概要

- アジナ・テパ遺跡はタジキスタンにある仏教寺院遺跡で、1970年代に旧ソビエトの考古学者によって発掘された。全長 12.8m の涅槃仏が出土しており、西アジアではバーミヤーンに次ぐ大きさの仏像として知られている。
- 2005年より、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金による「タジキスタン共和国アジナ・テパ仏教寺院保存事業」が実施されており、覆い屋の設置を含めた保存処置を行う予定。東京文化財研究所は、この事業のうち、保存作業に先立つ遺跡の考古学的クリーニングを担当している。
- 遺跡は長年放置されてきたため、土砂の堆積がみられる他、草本類の繁茂等によって劣化が進んでおり、壁も補強材を設置することでようやく崩壊を免れている状況。また、当初発掘時の廃土が遺跡に隣接して堆積しており、遺跡本来の外観・規模が不明瞭な状態となっている。
- 今回作業実施中に、床面から壁画片、塑像片と思われる遺物が出土し、1970年代の旧ソビエトの考古学調査において遺跡が完全には発掘されていなかったことが示唆された。更に発掘報告書と現状が異なっている点もみられ、部分的には考古学的再調査が必要となる可能性がある。

・予定されている覆い屋の形状はどのようなものか。

→ 二段になる可能性が高い。現在、タジキスタンの専門家が設計を行っている（方針策定は埼玉大学渡辺教授が実施）。現地は非常に風の強い地方なので、強度に留意する必要がある。

・ソビエト考古学は、政治的な理由によりかなりのスピードで作業を実施したため、現場に根を下ろした事業ができなかったと聞いている。このことが、この地域で後遺症となっているケースが多々見受けられる。

・アジナ・テパ遺跡の保存に当たっては、今回の作業の過程で様々な問題点が見えてきた。このことに関しては、関係者、専門家が集まって今後の最適な対応について検討する予定である。

■ シルクロード世界遺産登録準備委員会出席報告 [東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター 山内和也]

報告の概要

- タジキスタンで行われた、シルクロード世界遺産登録準備委員会にオブザーバーとして参加。当該会議は、UNESCO アルマトイ地域事務所によって推進されており、中央アジア 5 カ国(カザフスタン、キルギスタン、タジキスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン)および中国によって構成されている。
- 関係諸国は「シルクロード」の地理的範囲を限定的にとらえており、日本は含まれていない。また、2010年の世界遺産登録を目指しており、現状以上に課題を増大させないためにも、現状の範囲にとどめた形で世界遺産申請を考えている模様。したがって、現段階で日本が参加する余地はないと考えられる。また、時代的範囲についても関係者間では異論もあった。
- また、関係国間でも認識差があり、例えば遺産のエリアに関しても、中国のオアシスルートに対して、カザフスタンはより地理的にとらえにくい遊牧ルートを検討しており、同じようなコンセプトで遺産をまとめるためには更なる協議が必要と考えられる。
- 現在は、カザフスタン、タジキスタンの専門家が中心に準備を進めているが、各国の足並みが揃っていない。また、トルクメニスタンは当該準備委員会には一度も参加していない。手続きに要する時間を考えると、2010年の世界遺産登録は相当困難と考えられる。

・この準備委員会に ICOMOS は関与していないのか？ ICOMOS は、cultural route の視点で文化遺産を見直そうという動きを見せており、来年の 7 月にもトロントで専門家会議を企画している。したがって、当然今回のシルクロードの件についても ICOMOS の考え方等が反映されているべきなのではないか。

→ 今回の準備委員には、ICOMOS のメンバーがコンサルタントとして関与している。

・日本は、今後このプロジェクトに対してどのように関わっていくべきか。

→ 現状では、日本がここに参加することが必須ではないだろうが、シルクロード沿線諸国の一員として、プロジェクトの行く末を見守る必要はあるだろう。特に、関係諸国の定義するシルクロードの概念が限定的である点については、日本やイタリアをも含めた大きな概念で捉えてもらうよう、積極的に働きかけていくべきではないか。今回の 6 カ国での世界遺産登録申請に日本が関わらなかったとしても、登録自体はシルクロードに対する幅広い概念に基づいて行われるべきだ。

・日本は、シルクロード沿線の文化遺産に関する学術的蓄積を豊富に有している。この点からも積極的に発言をし、シルクロードに関する正しい概念の共有を訴えていきたい。

■ タジキスタン文化遺産の現状について [東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター 山内和也]

報告の概要

- タジキスタン出張時に同席したタジキスタン人専門家より、同国での文化遺産保存の現状に関する情報を得た。
- 同国では、現在全国に 34 もの博物館があり、今も博物館が地方に次々と建設されている。しかしながら、設備まで考慮されていないため、収蔵や展示に係る設備が存在していない。また、遺産が劣悪な環境で、記録もされないまま死蔵されているケースが多くある。
- また、旧ソビエト連邦崩壊に伴って、人材育成・技術移転が滞っており、同国の文化遺産保護行政における最大の課題となっている。現在、研究を遂行できる専門家はほとんどが 60 歳以上であり、若手専門家と呼べる人材はほとんどいない。このため、今後の国際協力活動においては、人材育成や技術移転に対して要望が集まっている。

・タジキスタンでは、フランスが文化遺産国際協力事業を展開しているのではないか。

→ 当初は入っていたようだが、近年はあまり力を入れていないようだ。ドイツ隊の活動もみられない。日本人では、数名が研究活動を行っている模様。

■ カブール周辺の文化遺産分布調査プロジェクトについて [国際交流基金]

報告の概要

- 国際交流基金では、第2期中期計画の中で、引き続き文化協力を力を入れていく方針。中でも、紛争や災害等により傷ついた人々の精神的誇り、自信を取り戻し、地域の活性化を促進する事業に重点をおく方向である。本年度も主催事業6件のうち、2件はアフガニスタンへの復興支援事業となっている。
- アフガニスタンでは、平成17年、平成18年に採用されていたハルワール遺跡調査が安全面の理由により中止となった。陶工招聘事業(フォローアップ)についても、平成18年は中止に追い込まれている。このことから、今年度は、何らかの形でぜひアフガニスタンで事業をと考え、カブール周辺の文化遺産分布調査プロジェクトを企画した。
- カブール周辺では、戦乱後の復興に伴って急激な市街開発が進んでおり、郊外にある貴重な文化遺産が記録もされないまま破壊されつつある。したがって、文化遺産保全のためには、まず周辺にどのような遺産があるのかを記録することから始めなければいけない。本プロジェクトはこの記録作業を支援するものであり、実施に当たっては東京文化財研究所文化遺産国際協力センターに委託することを計画している。2年間のプロジェクトを想定しており、最終年度には、ダリ語、日本語、英語で報告書を作成する予定。

・当プロジェクト立ち上げに際しては、東京文化財研究所実施のバーミヤーン保存修復事業ミッション(6月、9月派遣予定)でカブールを経由する際に、現地専門家と打ち合わせ等を行う予定である。

・国際交流基金では、安全確保をどのような形で行うのか。

→ 在アフガニスタン大使館と契約し、国連の安全基準に則ってプロジェクトを実施する予定。外務省と連携して安全確保を行いたい。

・バーミヤーンプロジェクトはもともとUNESCOとの契約で行っている事業なので、国連の安全基準に沿って活動を行っている。また、日本ユネスコ協会連盟が現地で寺小屋活動を行っており、NGOの往来も行われている。したがって、彼らも詳細な情報を持っているだろう。

■ 他分科会活動報告(企画分科会) [事務局]

報告の概要

- 平成18年度の事業報のうち、課題を整理。主な課題点は、①一般向け広報の不足、②会員専用コミュニティ・サイトの不振・活用不足、③会員向け広報活動・サービスの不足、④会員募集範囲が狭かったこと、など。
- 平成19年度の事業予定および重点作業項目について説明。平成19年度の重点作業項目は、平成18年度の課題点を受けて計画しており、①既存会員に向けたサービスやコミュニティ・サイト等を通じた情報提供の強化、②経済協力分野との連携強化、③一般への広報普及活動の強化の3点を重点的に取り組む。

・平成19年は、なるべく分科会から情報発信を行っていききたい。どのような情報をどのような形で発信するのか、今後検討していく必要がある。最終的には、内容に応じて事務局が判断していくことになると思うが、公開できる情報はできる限り積極的に公開してもらいたい。会議の資料も、ニュースとして事務局で概要をまとめ、

発信していけるのではないかと。是非工夫して欲しい。

- ・情報発信だけでなく、今後のコンソーシアムの活動強化に向けて、会員募集も課題だ。今後、コンソーシアムの活動を推進していくためには、会員を広げる努力が必要だと思われるが、そのためにどのような活動を展開していくのか。財団だけでなく、民間企業にも積極的に参加してもらいたい。どのような企業も、社会的貢献のための活動は必要とされる時代となりつつある。関連業界の方から、ヒアリングを行ったりする中で、会員のネットワークを広げていくことはできないのか。
 - 将来的には指摘の通り会員層を広げていくべきだと考えている。現在も、わずかながら民間企業の会員の方が増えつつある。
- ・コンソーシアム発足直後であるから、活動強化のためにも、当面は積極的に会員募集を進めるべきであろう。

■ その他

- ・国際交流基金文化事業部市民青年交流課より、2008 年度に開講される「中東理解講座」のコーディネーター実施の依頼を受けた。全 10 回の講義があるので、このうち 1 回は文化遺産国際協力に関するセッションを設けてもいいのではないかと考えている。[東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター 山内]
- ・次回は 9 月以降を予定。追って日程調整を実施する。

以上